

演 題 名：豚のリンパ腫の1例

発表者氏名：中山智之、山田 悟、林 和史

発表者所属：滋賀県食肉衛生検査所

1．はじめに：豚の腫瘍の中ではリンパ腫の発生頻度が高く、その大多数がと畜検査時に発見される。今回、本県においても、と畜検査において豚のリンパ腫を認めたので報告する。

2．検査材料：動物名；豚(県内産)、品種；LW、性別；牝、月齢；36ヶ月齢。平成22年8月25日に滋賀食肉センターにおいてと畜解体、検査を実施した。

3．生体所見：一般畜として搬入され、特に異常を認めなかった。

4．と畜解体所見：と畜検査において複数リンパ節に異常を認めたため全身性腫瘍で全部廃棄とし、採材臓器について精密検査を行った。〔肉眼所見〕 胸骨腫瘍；胸骨内側に、手拳大よりやや大きめの腫瘍を認めた。腫瘍表面は脂肪様で、充うっ血部位を複数箇所にも認めた。体幹との切断面はリンパ節様で大半が充血していた。断面はやや膨隆で、平滑な脂肪様組織内に小豆大から空豆大の境界明瞭な小塊が複数個存在した。脾臓；肥厚、脆弱化を認めた。

肝臓；著変を認めなかった。腎臓；腎臓皮質嚢腫を2個認めた。次の通りリンパ節に腫大を認めた。下顎リンパ節 9×3×3cm、腸間膜リンパ節 7×4.5×2cm、皮下リンパ節 10×4×0.5cm、耳下腺リンパ節直径3cm、内腸骨リンパ節うずら卵大、鼠径リンパ節ゴルフボール大。

5．精密検査：〔スタンプ標本所見：ディクウィック染色〕 胸骨腫瘍、脾臓、肝臓、腎臓および各リンパ節；小～中リンパ球を高度に認めた。胸骨腫瘍、下顎リンパ節および耳下腺リンパ節；核分裂像を認めた。脾臓；好酸球を多数および2核細胞、細網細胞、単球、核に切れ込みのある細胞および好中球を認めた。胸骨腫瘍、内腸骨リンパ節および鼠径リンパ節；大リンパ球を散見した。耳下腺リンパ節；核に切れ込みのある細胞および細網細胞を認めた。〔病理組織所見：ヘマトキシリン・エオジン染色〕 胸骨腫瘍；ハッサル小体を多数認めた。クロマチン粗で淡明な核と数個の核小体を持つ腫瘍細胞のび漫性増殖を認めた。脾臓；腫瘍細胞の増殖およびうっ血を認めた。肝臓；腫瘍細胞の肝小葉間への軽度浸潤増殖および軽度の囲管性細胞浸潤を認めた。腎臓；腫瘍細胞の腎臓組織への浸潤増殖および尿管の壊死を認めた。下顎リンパ節；腫瘍細胞のび漫性増殖を認めた。リンパ組織の空疎化を認めた。

腸間膜リンパ節；腫瘍細胞のび漫性増殖を認めた。Starry Sky 像を高度に認めた。耳下腺リンパ節；髄質に空胞変性および腫瘍細胞のび漫性増殖を認めた。皮下リンパ節、内腸骨リンパ節および鼠径リンパ節；腫瘍細胞のび漫性増殖を認めた。〔病理組織所見：スダンブランク B 染色〕SBB 陽性の腫瘍細胞を、胸骨腫瘍および下顎リンパ節のごく一部にのみ認めた。

6．診断：複数臓器、複数リンパ節に腫瘍細胞のび漫性増殖、浸潤増殖を認めたことから、

組織診断名：悪性リンパ腫、 疾病診断名：豚の白血病と診断。胸骨腫瘍は、ハッサル小体を多数認めたことから、胸腺由来と判断。リンパ腫の分類としては、Jarrettらの分類における胸腺型ないし多中心型、中島らの分類における縦隔型、LSG分類においては、小型および中型リンパ性腫瘍細胞の混在を認めたため、び漫性リンパ腫小細胞・中細胞混在型に該当すると考える。SSB染色の結果を後藤らの判定方法に当てはめると、SBB染色細胞が70%以下であるため陰性と判断し、本症例は、リンパ球性白血病に該当すると考える。

7．まとめ：豚のリンパ腫の検出率は、10万頭当たり1～3例との報告や、10万頭当たり繁殖豚が22.3例、若齢肉豚が0.4例との報告、10万頭当たり2.3例との報告などがある。本県の豚のと畜頭数は、平成19年2月から平成22年12月までで繁殖豚932頭、若齢肉豚33,585頭である。今後、豚のと畜頭数、リンパ腫の発見状況により、より正確な豚のリンパ腫の検出率が導き出されると考える。検査に研鑽し、全国的な検出率と比較、検討したい。